令和５年度　岡山県立瀬戸高等学校　学校評価書

校長　　笹 埜　圭 亮

1　自己評価

Ⅰ　評価結果　　（別紙参照）

Ⅱ　分析・改善方策

① 授業改善、授業が自分事となる学びの実現

・学校改善アンケートでは、約85%の生徒が「授業等に積極的に取り組んでいる」と回答しており、学期の振り返りでも「授業・予習・復習を徹底的にする」と回答する生徒が年次を追うごとに高くなり、3年次では肯定的回答が約9割を占めた。

・様々な教科や学習場面において、ＩＣＴ活用機会の拡充や効果検証などに取り組むことができており、JAETの「学校情報化優良校」の認定につながった。

・家庭学習時間は各年次目標に達していない。授業外の学習について主体性や学びの自己調整などにも着目して対策を講じ、質・量の両面で改善していく必要がある。

② 生徒の自走、自立した社会の構成者となるためのより良くなろうとする力の育成

・部活動や学校行事に積極的に取り組んでいると自覚している生徒は88%と高く、生徒たちが自ら考え、話し合い、行動し、達成感を味わっている姿が随所に見られた。

・探究学習では選択や再挑戦を繰り返し、自分の好きなテーマを掘り下げていく活動を通じて、社会課題への関心、理想や社会参画意欲などを向上させることができている。

・多様な価値観や世界の様々な事象にも思いが及ぶように、視野拡大を促したい。

③ 健全で良好な人間関係の構築、実践的なコミュニケーション能力の育成

・「自ら進んで積極的に挨拶をしている」と回答した生徒は約75%で改善の余地があるものの、他者を尊重し、励まし合い、温かく楽しい集団を築こうとする態度が養われており、コミュニケーションの面で自信を付ける生徒も多く見られた。

・外部講師による講話や座談会、フィールドワーク、探究学習の発表会などで年代や経験値の異なる他者に触れる機会を多く設け、生徒の成長に手ごたえが感じられる。

・心理的安全性を保ちながら、高みを目指して良い影響を与え合える集団を目指したい。

④ 地域連携、地域貢献を行う力と社会変革の担い手としてイノベーションを起こし、エージェンシーを発揮する力の育成

・社会貢献活動や地域イベントへの参加を活発に行うことができた。また、近隣の中学校へ探究学習のメンターとして生徒が出向き、自身の活動紹介や中学生への助言などを行う機会も増え、新たな価値の発見や自己有能感の獲得につながっている。

・価値観や興味関心に応じて問いを設け、質の高い行動や思考を積み重ねて発信するというプロセスを経験し、自分や社会をより良く変革させようとする意識が育っている。

・ＤＸやグローバルの視点などを取り入れ、社会で活躍するための基礎力向上のためのプログラムを研究・実践していきたい。

2　学校関係者評価委員名

関藤　定生（本校ＰＴＡ会長）　　金谷　文則（本校同窓会長）

三浦　隆志（ノートルダム清心女子大学非常勤講師）　　信宮　誠　（岡山市立瀬戸公民館長）

吉川　幸　（岡山大学教育推進機構准教授）

3　学校関係者評価

・授業が分かりやすいことや、一人一人への個別対応も丁寧であることなどを生徒・保護者の声として聞く。そのような瀬戸高の魅力を一層広めてもらいたい。

・学習に対する考え方の根本を身に付けさせ卒業後の学びの世界を意識させるとともに、情報へのアクセス・発信、生成ＡＩ等の活用と検証、情報の深化などの力も養いたい。

・探究的な学びを各教科でも推進し横断・融合を進めてもらいたい。身に付けさる力を意識し、自己決定やアウトプットの機会を設けるなど授業改善を進めなければならない。

・各分掌や年次団等で目標設定や中間・年度末の評価を行っているが、評価の根拠や、一貫した基準があるのか見えにくい部分があるので、なぜその評価なのかが適切に説明できるように整理していく必要がある。

4　来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

・コミュニティ・スクールへ移行し、校内外の連携を一層強化し、社会に開かれた教育課程の実現を目指して本校の課題を共有し、各活動における目標設定、計画、実践、評価等の質を向上させる。

・デジタルリテラシーの高い人材を育成するために、機器・設備、教員のスキル、提供プログラムなどの学習環境を整備し、学習のＤＸ化を加速させる。

・地域・中学校との連携や情報発信を工夫・改善し、本校の特長を広く伝えていく。